

人生・三昧・三味

結城さんのことを考えると、「三昧」という明るい寿司屋を思い出した。手元の不如意が留学生の常態であるため、会合の際はよくサイゼリヤやカレー屋を利用し、あまり寿司屋へ行かなかった。恐らくその状態に気付いたため、結城さんはたびたび私たちを「三昧」へ招待してくださった。店のカウンターから寿司屋の匠の技を見ながら、結城さんは「日本語にはこの場所のお茶はあがりとも呼びます」といった文化豆知識を教えてくれた。このような機会を得ることで、私の勉強の疲れや異国における寂しさは、どんどん消えていった。

小学生の時、魯迅先生のある文章を学んだ。魯迅先生は、子供の時に「三味書屋」という私塾で勉強したことがある。「三味」というのは何の三つの味であるかについて、いろいろな観点がある。有力説によると、それは宋代の人の句「詩や書経は太羹、史は折俎、子は醯醢」から由来するものである。幼い頃の魯迅は、そこで塾の先生である寿懐鑑先生に出会った。寿先生は博学で品行方正な人であり、彼に対する魯迅の懐かしい思いは各所から汲み取れる。成年に達すると、魯迅は救国の志を持ち、留学のために日本へ旅立った。日本においては、魯迅は藤野巖九郎先生をはじめとする日本人の先生方の指導を受け、支援を受けた。それも中学時代に学んだ文章にあった。

「三味」で魯迅先生の物語を思い出すと、「三味」鮓屋と「三味」書屋の間にどんな関連性があるかことについて好奇心にかられた。調査してみれば、「三味」という言葉は梵語の「samādhi」から音訳するものである。心を一つのものに集中させ、安定した精神状態を通じて物事の真諦を理解する意味。中国語の「三味」と「三昧」は音も形も似ているため、「三味」はよく「三昧」として誤記し、漢字の本来の意味から新しい理解が生まれて、ついに新たな概念となってしまった。法律の研究をする際にも偶々このような状況に気付いた。すなわち、西洋から由来した概念は漢語の言葉へ翻訳したものの、実務において運用するときに多種多様な「地元」の理解が持ち込まれ、最終的に新たな意味を含め概念となってしまったことである。

結城さんと一層に仲良くなってから、だんだん「三味」という言葉の「重さ」をわかるようになってきた。結城さんの話によると、大学をご卒業になった時はまさに日本の経済高速成長期の時であった。学問の世界に身を置きたいと考えていたが、様々な事情から伊藤忠商事に就職した。その後数十年の活躍を経て法務部部長の立場で定年を迎えた。しかし、学問に対する信念や情熱は冷めておらず、結城さんは高林先生門下に入り、法学

研究の道に進んだ。営業秘密について研究を進め、80歳を前にして博士号を取得した。そして、博士号学位記授与式の写真を私へもお送りくださった。今も迷う時に、結城さんのことを思い出す。いったいどんなものが結城さんを支えていたであろう。結城さんが私たち若い世代の学生を連れて「三昧」という店へ行ったことは、ご自身の心の声に無意識のうちに従ったのか、あるいは様々なことを考慮の上でのことだったのか。残念ながら、それはもはや永遠に解けない謎である。しかし、結城さんの学問や人生に対する真摯な態度は、永遠に私たちの若い世代の心に深く刻まれる。

(謝 晴川)